
目 次

序	5
第 I 部 現代中国学原論	7
はじめに	7
[I] 科学研究の方法的基礎	9
(1) 構造主義と「認識の客観性」	9
(2) 「パラダイム史観」と「認識の客観性」	9
(3) 「人間中心主義」の目的論と近代科学の誕生	10
(4) 「科学実験」の目的	11
(5) 人文・社会科学と「人間世界」	12
(6) 近代科学の陥穽：「対話」性の欠如	12
(7) チャイナ・ウォッチングの本質	13
[II] 近代科学と「認識の客観性」	14
(1) 人文・社会科学における目的論と因果論	14
(2) 自然科学における因果論と目的論	17
(3) 目的論に対する無自覚と結果責任の欠如	18
[III] 現代中国研究における方法的無自覚	19
(1) 戦前戦中の中国研究、その外国研究としての方法上の問題と陥穽	19
(2) 戦後、1980年代までの現代中国研究、 その外国研究としての方法上の問題と陥穽	22
(3) オリエンタリズムと研究の「客観性」	24
(4) 現代中国学とオリエンタリズム	26
(5) 目的論の排他性と現代中国学の「客観性」	27
(6) 1990年代の現代中国研究の方法的問題	29
(7) 「情報開示」「アカウンタビリティ」「対話」の手続きの科学方法論上の意義	31
(8) 発展途上諸国研究の別名、「地域研究」の方法的問題	32
(9) 日中両国間の教育・研究交流が抱える歪み：学問教育世界の階層性	34
(10) 日本における現代中国研究の「歪み」	36
[IV] むすびに代えて	37
第 I 部脚注	38

第2部 竹内好再考と方法論のパラダイム転換	43
はじめに	43
[I] 知識人と内なる民衆性	45
[II] 「非政治」と「政治」：水俣病の事例から	47
[III] 坂口安吾と劉再復：戦後と革命後	50
[IV] 根拠地および根拠地の思想	52
[V] 「オリエンタリズム」と「内発的發展」：敗北の自覚をめぐって	56
[VI] 時間のディレンマ	58
[VII] 「情念国家」の形成とカリスマ：日中両国の相似性	63
[VIII] 時間意識と空間意識：その「ねじれ」と「時間の竜巻」	68
[IX] 毛沢東と劉少奇、鄧小平：「敗北の自覚」をめぐって	71
[X] 「掙扎」と「訣別」と	73
[XI] むすび：「日本ナショナリズム」のゆくえ——「有根」と「無根」と——	75
第2部脚注	78